

## 令和7年度京都市はぐくみ推進審議会 摘録

日 時 令和7年12月15日（月） 14：00～16：00

場 所 京都経済センター 6－C会議室

出席者 安保千秋委員、石垣一也委員、石塚かおる委員、上田七菜委員、  
内海日出子委員、大束貢生委員、大野一誠委員、川北典子委員、  
志澤美保委員、杉本五十洋委員、竹内香織委員、竹久輝頭委員、  
西島千晴委員、藤本明美委員、升光泰雄委員、山雄康弘委員、  
山下維久子委員、山下和美委員、山羽学天委員  
(19名)

欠席者 和泉景子委員、稲川昌実委員、伊部恭子委員、井本真悠子委員、  
岡美智子委員、北川憲一委員、小谷裕実委員、塩見葉子委員、  
中野浩子委員、藤野敦子委員、松田義和委員  
(11名)

### 次第

1 開会

2 議題

「京都市はぐくみプラン＜2025-2029＞（京都市子ども・若者総合計画）の進捗について

3 閉会

(司会：本間 子ども若者はぐくみ局子ども若者未来部育成推進課長)

司会	<p>令和7年度「京都市はぐくみ推進審議会」を開催する。</p> <p>本日の会議については、市民に議論の内容を広くお知らせいただくため、「京都市市民参加推進条例」第7条第1項の規定に基づき、公開することとしている。</p> <p>本日の会議は、大学生の市民公募委員の皆様から、「意見を言いやすい会議づくり」について、事前に御意見をいただいております、その御意見を一部取り入れた形で開催させていただくことを御承知おきいただきたい。</p> <p>開会に当たり、子ども若者はぐくみ局長の福井より挨拶を申し上げます。</p>
福井局長	<p>(開会挨拶)</p>
司会	<p>本日お集まりいただいた委員を紹介させていただく。</p> <p>(出席委員の紹介)</p>
司会	<p>「京都市はぐくみ推進審議会条例」第6条第3項において、当審議会は、委員の過半数が出席しなければ、会議を開くことができないこととされているが、本日は、委員30名中、19名の方に御出席いただいているため、会議が成立していることを御報告申し上げます。</p> <p>ここからの議事進行については、安保会長にお願いします。</p>
安保会長	<p>本日は自由な雰囲気で行進できればと思う。それでは、議事に入る。「京都市はぐくみプランの進捗について」事務局から報告をお願いします。</p>
事務局	<p>資料1・2を用いて説明</p>
安保会長	<p>ただ今の事務局からの説明について、御質問や御意見があればいただきたい。</p>
山下委員	<p>重要事項5のSNS等を活用した相談支援は、予期せぬ妊娠に特化したものでありながら相談件数が多かったと思う。色々な相談窓口が電話を中心としているなかで、今後SNSの活用を広げていくのか。</p>
事務局 (子ども家庭支援課)	<p>SNS相談は以前から行っている事業であるが、電話よりもSNSの方が相談しやすいという若年層の母親が多いようであり、今回の実績件数につながったと認識している。夜中の即時対応など現実的に困難な面もあるので、可能な限りで拡充してまいりたい。</p>

<p>升光委員</p>	<p>い。</p> <p>色々な取組が進められていて良いことだ。「子ども・若者の声を聴く」をテーマとした令和8年1月9日の基調講演では、実際に子どもの声を聴く時間は無いのか。せっかくであればそのときにも声を聴けたらと思う。</p> <p>進捗報告では、若者に向けて社会が前向きに関わっていく取組が多くあったが、若者自身が社会に向けてこんなことをしていきたいという方向の取組はどうか。例えば高齢者に対して「してあげる」取組は多いが、同時に高齢者側が誰かに何かを「したい」衝動もあると思う。若者の声を聴くと同時に、関わりたい、表現したい思いにこたえる取組が大事だと考えるが、そのような取組が今後どう盛り込まれるのだろうと思った。</p> <p>また、社会問題として高齢化がある中で、高齢者と幼子や若者が関わりを持つことも社会的に大切な取組だと思う。難しいかもしれないが、高齢者と若年層がどう生き生きと関われるのかという視点も盛り込めたらと思う。</p>
<p>事務局 (育成推進課)</p>	<p>1月9日は、子どもの登場は予定していないが、普段から施設で直接子どもの声を聴いている職員の皆様が、子どもの声を聴く重要性を振り返りつつ学んでいただき、その学んだことを実際の現場で生かしてもらいたいと思っている。</p> <p>はぐくみプランでは居場所と出番を掲げているが、これは子どもだけでなく、高齢者を含む全体においても掲げていることである。市長は「混じりあい」「ぬか床のような」とよく表現しているが、例えば、学校や青少年活動センターが若者の居場所としてだけでなく、それぞれが活動することで出会いの場となって、高齢者など地域の方とつながっていったらと思う。若者の意見を聴きつつ、青少年活動センターの皆様とも協力して進めてまいりたい。</p>
<p>福井局長</p>	<p>ミニ・ミュンヘンでは児童館学童連盟の皆様に非常に御尽力いただいた。一部の児童館では、ミニ・ミュンヘンの後でも、地域や学生の方と交流し、場を作るといった取組が行われている。</p> <p>行政が枠にはめるのではなく、自然発生的に波及できるようになることを期待している。</p>
<p>安保会長</p>	<p>若者と関わりのあるユースサービス協会の立場として、竹久委員から御意見いただけるか。</p>
<p>竹久委員</p>	<p>青少年活動センターでも若者が主体になって活動しており、地域の方とともにやっているイベントもある。若者が提案し考えて作るだけでなく、関わりの中でお互いの気づきが生まれるこ</p>

<p>安保会長</p>	<p>ともこのような取組の良いことだと思う。高齢者の話があったが、地域の色々な方々と出会っていくことが重要な部分であり、その仕掛けを作ることも大事である。一方で大人側の視点で作ってしまいそうになるので、子ども・若者の視点が反映される仕組みになるとより色々なことが進んでいくと思う。</p> <p>私からは基調講演についてお話したい。大谷氏は日本初の国連子どもの権利委員会委員長に就任された方であり、そのような経歴から難しい話をされるかもしれないという御心配があるかもしれないが、大谷氏はわかりやすく子どもの権利条約の精神やそれを踏まえた大人のすべきことを話される。今回京都市が依頼し、講演していただけるのはとても嬉しいことである。今後の講演会等で、子どもが直接話してもらおうといったことができればと思う。</p> <p>では今回の講演でなぜ子どもを呼ばないかという、子どもの権利条約の12条は意見表明権といわれており、意見表明権というと積極的に意見を言うことと捉えられることもあるが、最近では意見表明権よりも意見を聴かれる権利と訳すことが多い。子どもが積極的に意見を言わなくても、大人側が意見を言える環境や情報を用意することが求められるものとして大きく、今回は意見を聴かれる権利を実現するため、子どもと日頃接している人に、子どもの権利条約の神髄を知っていただき、より子どもの意見を聴く準備をしていくということを目的とし企画されたと認識している。是非御参加いただきたく、また後日公開されるアーカイブも見えていただきたい。</p>
<p>竹久委員</p>	<p>重点事項3の図書館の居場所づくりについて、全国的に図書館が見直されているところであり、図書館と青少年活動センターのようなユースセンターを併設した施設も複数箇所できている。図書館と子ども・若者の居場所は関連性の高いものであり、試行的にこのような取組がされているのはとても良いことだと思う。また、青少年活動センターに行くというと親から「何遊びに行っているの」と言われることが時々あるが、図書館に行くというと聞こえが良い。図書館がどういう場所なのか親にとっても見えやすいのだと思う。そういう所で子ども・若者の居場所づくりに取り組まれるのは良いことだ。</p> <p>一方で今回の図書館の市民意識調査の調査対象が18歳以上であることが気になった。18歳未満の声をどう捉えているのか聞かせていただきたい。サードプレイスに関する来場者アンケートは中高生世代も含んでいると思うが、このアンケートはどのようなものになっているのか、まだ分析途中かもしれないが、市民意識調査から見えてきたものがあれば教えていただきたい。</p>

<p>事務局 (育成推進課)</p>	<p>調査の結果については集計中である。サードプレイスの実証実験を始める際の暫定値の情報によると、図書館をサードプレイスとして感じる人の割合が23.7パーセント、感じない人の割合が71.4パーセント、無回答1.3パーセントであった。図書館の印象として、全体的にきれいで充実していると答えた方が37.4パーセント、居心地が良いと感じる方が33.6パーセント、本棚の配置がゆったりしていると答えた方が25.5パーセントであった。また現在図書館は自習禁止であるが、今回の実証実験の一環として自習ができるようにするなど、様々な実験を実施し感想をいただき、アンケート調査の結果も踏まえて、今後の図書館のあり方を検討していくと聞いている。</p> <p>先ほど、竹久委員から図書館と青少年活動センターの併設について御紹介いただいたが、例えば茨木市のおにクルでは市民活動センターと図書館が一体の施設になっており、本市でもラクト山科にて図書館と遊び場を一体とした新しい形の図書館を検討しているところである。</p>
<p>竹久委員</p>	<p>青少年活動センターは図書館から自習利用できる場所として紹介いただくことがあるが、機能がバッティングするから良くないというわけではなく、若者にとっての選択肢が増えるのは良いことである。青少年活動センターと連携した事業を展開する図書館もあるが、そのような形も含めて可能性を広げていただきたい。</p>
<p>西島委員</p>	<p>せっかく私達のために会議の工夫をしていただいたので、それに応えたいと思っていた。</p> <p>図書館の利用について、小学生のときは毎年読書マラソンに参加して楽しかった思い出がある。図書館では乳幼児や小学生向けの本は充実しているが、高校生・大学生向けの本が少なく、だんだんと足を運ばなくなっていった。図書館が乳幼児と小学生又は高齢者向けの居場所になっているように感じる。</p> <p>ただ、最近再度図書館を利用しだしたのは、電子書籍の導入や図書館の利用カードをスマホで表示できるようになったことで、気軽に図書館へ足を運べるようになったからである。そのような取組が大学生世代の利用を活性化させるだろうし、工夫を凝らし使いやすいサードプレイスになっていけば良いと思う。</p> <p>先ほどSNS等を活用した相談支援について質疑応答されているなかで深夜対応が難しいとの話があったが、弁護士相談は24時間対応されていることが多く、これは深夜に誰かに話したいというニーズに応えられてのことだと思う。子ども・若者にとって電話相談のハードルが高い理由として、家族にばれてしまうリスクが大きいと思う。SNSの相談は家族にばれず、仮にばれても中断できるのが強みだと思う。その強みを真に発揮するのが深夜対応でもあると思うので、是非充実してほしい。</p>

事務局 (育成推進課)	<p>西島委員のおっしゃるとおり、市図書館は子ども向けが充実していて、高校生・大学生にとっては自習ができないなどのマイナス面があったが、変えていけるよう教育委員会も考えているところである。</p> <p>SNS相談については、子ども・若者向けでも電話、対面の相談が主流であり、子ども・若者にとっても話す、電話をかけるということにハードルがあると思うのでSNS相談も積極的に検討していきたい。</p>
事務局 (子ども家庭支援課)	<p>きょうと妊娠SOSは、深夜に受信はできるが返信が朝になってしまう。またいわゆる「家族バレ」についての御意見をいただいたが、ヤングケアラーの実態調査でもそうした懸念があることを実感している。今後もSNSを活用した仕組みの充実を図ってまいりたい。</p>
安保会長	<p>今回若者の市民公募委員の皆様から話しやすい会議運営の御提案をいただいたが、だからと言って必ず発言しなければいけないというわけではないので、気楽に御発言いただきたい。</p>
志澤委員	<p>ヤングケアラーの支援は難しく進みづらいなかで、今回取組がなされたことは素晴らしい。利用実態として4世帯に繋がったとあるが、実際に支援が必要な人を見つけられないという課題を強く感じているところ、具体的にどのような世帯の人なのか、どのようにして拾えたのか教えてほしい。</p>
事務局 (子ども家庭支援課)	<p>以前から実態調査自体は行っており、令和3年度には統計調査として小中高生対象に行ったところ、およそ1クラスに1・2人ほどヤングケアラーがいることが明らかになった。今回の調査では数字的把握より、困ったことがあったら連絡してください、という周知を行い、個別に支援が必要な子どもに繋がることを目指している。</p> <p>利用実績で挙げた4世帯はヤングケアラー世帯訪問支援事業として家事支援を行った世帯数である。4世帯はいずれも小学生又は保育園の子どもであったと記憶している。支援事業が用意されていても、当事者がなかなか声を出せないという実態があり、こちらからアプローチしていくことが必要であると考えている。</p>
志澤委員	<p>一つ一つのケースを積み重ね、発展していくことを期待している。</p>
大野委員	<p>主要施策実績一覧の6・7ページにある複数の公園事業について、プラン策定の際に行った中高生アンケートでも公園のルールや設備に関する意見は多かったが、ここに掲載されている情報</p>

<p>事務局 (育成推進課)</p>	<p>は、公園全体の数を考えたときにごく一部であるように感じる。各公園のニーズを市がどう把握し整備していくのか教えてほしい。</p> <p>市内の多くの公園を所管する建設局にて、民間の力を借りて公園を活性化する取組である Park-PFI 事業を開始しており、ルールについては地域団体と協議しながら随時見直しがなされている。遊具更新については今年度中 61 公園 136 機を対象に実施予定であり、また宝ヶ池公園の菖蒲園では新しい土地活用事業として、屋内遊び場にカフェを併設した複合施設の整備進められる予定である。</p>
<p>川北委員</p>	<p>図書館は、学校にも家にも居場所がない子どもたちの居場所になりうると思うが、子どものことを分かっている司書や人がいてほしいと思う。人員配置も考えていただきたい。</p> <p>また、学校図書室も保健室登校でなく、学校図書室登校ができるくらいになってほしいと思う。そのためには、学校教員ではなく図書館司書の立場の方がいてほしいと思う。</p>
<p>事務局 (育成推進課)</p>	<p>御意見については教育委員会にしっかり伝えたい。こどもみらい館の図書館では、図書館司書が子どもの勉強を温かく見守っている。その他の図書館も、子どもがいたい、勉強したいと思える場所になるよう、各所属と情報共有してまいりたい。</p>
<p>竹内委員</p>	<p>居場所の評価指標として利用率や人数が妥当でない時代になっていると思う。たくさん利用されることがいいことなのか、居場所を作ったときに、それが何を目指すのか注目して議論を深めていきたい。</p> <p>主要施策実績一覧の 2 ページにある文化芸術事業について、例えば辰巳保育所では、来年年長がいらないなど地域によって子どものいる場所に偏りがあり、体験にも格差があると感じる。</p> <p>また、子どもの意見反映については、呼吸を聴くという観点がある。声になる前の声を大人が聞き取るということであり、子どもの声を聴くということは大人にとって怖く覚悟のいることである。SNS という手段は維持しつつも、言葉で交わす機会を大切にしてほしい。</p>
<p>事務局 (育成推進課)</p>	<p>今までのプランや他の計画では、数値結果を示されることが多かったが、なかなか数値では人のことを決められないと思う。</p> <p>子どもの声を聴くということについては、普段と違うという雰囲気を感じ察することも意見を聴くことだと思う。意見を聴くということもレベルがあると思うが、まずは子どもに接する人が意見を聴くことを理解することが大切だと判断し、基調講演を行う運び</p>

<p>安保会長</p>	<p>となった。プランの方向性として子どもの意見を聴くことを試行錯誤しながら進めてまいる。</p> <p>子どもの権利条約における意見は opinion ではなく、view であり、子どもの意見表明は赤ちゃんでも非言語手法でも表現できるといわれている。それをどう測るかについては研究が進められているところであり、既に保育園等においては見られているところだと思う。</p> <p>ここからは、お一人ずつ、この間の取組や振り返り、今後に向けての抱負等をお聞かせいただきたい。</p>
<p>石垣委員</p>	<p>我々は経営側の立場から、子育て、地域との取組について啓発啓蒙も含めて進めているところである。子どもを中心としたときに、従業員の労働時間のほか、地域との連携、家庭と仕事、医療と仕事の両立など、労働と家庭、地域活動を共に進めていく必要がある。子どもを育てる、はぐくんでいくことを含めた取組をしっかり考え、従業員の意識改革や相談支援に取り組みたい。このような社会の流れを経営者も理解はできているが、具体的にどう取り組むかが課題である。その点についての支援を進めていきたい。</p>
<p>石塚委員</p>	<p>児童養護施設では75%が虐待案件であり、少子化であるにもかかわらず虐待が増えている状況である。そのためケースワーカーや一時保護所の職員を増やしてほしい。</p> <p>また、地域の方から「こういうケースって虐待ですよ」と質問を受けることもあり、まだまだ通報にためらいを持っておられるように感じる。早い段階での通報をしていただけるよう、周知啓発ができたらと思う。</p> <p>ほかに、共働きの方が里親を検討されるときに、保育所に預けようと思っても保育所に空きがなく、里親を断念せざるを得ないケースがあるため、市が里親を優先する制度を用意しても良いのではないかと考える。</p> <p>先ほどSNSでの支援が議題にあがっていたが、児童養護施設の子どもがスマホを持つのは並大抵でない。職員と個別に連絡を取るのとは別の観点で問題が出てくる。SNSの支援が充実される一方で施設の子どもたちはそちらにアプローチできない。また、SNSによるトラブルに子どもたちが巻き込まれるリスクもあり、例えばオーストラリアでは、子どものスマホ規制がなされている。</p> <p>最後に「子ども・若者の声を聴く」の基調講演では私も参加させていただく。言語化できない子どもの声を態度や表情、行動から見て取れる関係づくりが私の求められていることだと思う。当日子どもの参加はないが、子どもの事例をたくさん紹介したい。</p>



内海委員	<p>こども園と児童館に携わっているが、人的環境が大切だと感じており、赤ちゃんの表現を読み取れる大人がいることがとても大事である。最近、家庭科の保育授業として堀川高校の生徒が40人来てくれた。生徒が素直な感想を聞かせてくれたが、世代の違う子ども同士が関わる機会が少ないと実感し、より若年の子どもにとって、お兄ちゃん・お姉ちゃんが自分を気にかけてくれるという環境が大事だと思っている。</p> <p>またどの施設も人材確保が難しい。施設によっては大学生にお手伝いをお願いしているところもあるが、そのような支援してくれる団体と繋がりを持ってないことが今の課題だと感じる。必要なときに繋げられる関係、環境づくりを市がしてほしいと思う。</p>
大東委員	<p>京都基本構想について、事務局から依頼があり、ゼミと授業で計3回関わった。先週議会を通過したとのことだが、学生の感想をきくと「難しいことが書いてあってちょっと良く分からないです」という意見が多く、最終版をみてもやっぱりよく分からない表現のままだなと思った。今後、事務局から結果のワークショップをしたいという申し出を受けており、私も聞かせてもらおうと思っている。若者の意見を聴きたいと思ったことは望ましいことであり、若い人が中心となっていく社会のサポートをしていきたい。</p>
志澤委員	<p>全ての人に対するポピュレーションアプローチと、特に支援を求める人へのアプローチの2つを両立しなければ根本的な解決にはならないと常日頃感じている。ポピュレーションアプローチとして力が入れられるべきは乳幼児健診であり、母親の声を声にならないものも含めてしっかりと拾える技術が必要だと思う。また、今までの審議会でも話させていただいたが、受援力、助けを求められる力をはぐくんでいかないと、結局支援にたどり着かないと強く考えている。支援をしっかりと組み立てるだけでなく、親や子本人が必要な時に支援を求められる力を育てる支援をしてほしい。</p>
杉本委員	<p>これまでの会議では待機児童対策が大きな議題だったが、今では質の向上が議論になっている。認定こども園はもともと保育園であった園と幼稚園であった園の2種類があるが、利用者にとって0歳から小学校就学まで1つの園で預けられる認定こども園は関心を持たれているところである。就労・教育支援をどちらも担う認定こども園ごとの特性は、各園で情報を出してはいるものの、横断的に分かりやすいインフォメーションがない。最終的には親が判断することになるが、情報として提供される機会があれば良いと考えている。</p>

竹内委員	私の立場としては、中学校の部活動地域展開が重要な議題だと考えている。開けて終わりにならないように、市が部局を超えて議論を重ねないといけないと感じている。
竹久委員	<p>左京や醍醐、向島、洛西、右京などの青少年活動センターのない区・支所地域に対し、こちらから出向く形で場づくりを展開している。その中で地域と連携し、そのような場をつくるのはすごく大切であると思うが、一方それらの活動で青少年活動センターの機能をすべて充足させることはできず、不十分ながらも小さな場ができることで今より少しでも良くなることを目指しているところである。</p> <p>また、最近A I への相談を若い世代がされているところもあり、A I との付き合い方も振り返る必要があると思っている。A I という当初はよく分からないものと個人的にも思っていたし、それがすべて正しいと思い込んでしまう怖さもあるだろう。誤解のないよう捉える姿勢も大事ではないかと思う。</p> <p>最後に、「声を聴く」について、聴くことそのものよりも前段階が大事だと考えている。先ほどの御意見にもあったが、声だけ聴いてしまおうというのではなく、日常の中でどう関係性を築いていくのか、声や声にならない前段階を含めて色々な表現から受け取ることに繋がると思うと、総合的に捉えるべき課題と改めて感じている。</p>
上田委員	<p>昨年、他自治体の若者の市民公募委員との交流会に参加したが、自治体によって会議のやり方が全然違うと感じ、例えば京都市がホテルで開催していることを話すとびっくりされた。町田市では図書館で開催しており、子どもに聞かれても恥ずかしくない会議がなされていてすごいと思った。今日のお菓子や机のレイアウト、ラフな服装といった取組もありがたいが、更に発展させるためには、マイクがあると緊張してしまうので机を無くすなどして、もっと近い距離で話せたら良いと思った。</p>
大野委員	<p>この2年間の委員活動で様々な学びを得られた。ユースカウンスル京都での若者への意見聴取の中で、こんな声があるのだということを身に染みて感じ、また、今回報告を受けたサードプレイスや遊び場の検討などで、自分の活動が少しでも貢献できたのではないかと感じる。意見反映についてはこれからもみんなで考えて京都市のために活動できたらと思う。</p> <p>個人的に行政や政治に関心があって市民公募委員として参加したが、審議会や部会を通じて、行政がこうやって有識者の方々と意見を交換してまちのために活動しているのだということを学べた。</p> <p>最初の会議はすごく雰囲気がかたく緊張して、2年間頑張れる</p>

西島委員	<p>のだろうかと感じていたが、何とか職員の方にもサポートいただき、話しやすい環境をつくっていただいたことで、自分が意見を出しても良いのだ、社会に興味を持って良いのだと感じられ、自分自身の自己成長にも繋がる有意義な2年間であった。</p> <p>今回の審議会での工夫や、実績報告でも様々な取組が実施されていて、若者の意見反映に向けて、市が時間的にも金銭的にも多大な投資をされたのではないかと実感している。若者が活躍する社会を実現するためには、若者と地域、行政の歯車がきちんとかみ合って相互作用することが大切だと考えているが、この2年間で行政の職員が歯車をぐいぐい回してくれたと感じる。それを受けて、若者自身がどう応答するかが大事だと思うので、京都市のまちづくりに向けて私達がどう動いていくのか考えていきたい。</p> <p>最初は市民公募委員として、市民の代表として頑張らないといけないと思っていたが、流石に代表は無理かと思い自分自身の意見を大事に発言することを心掛けてきた。立場や役職をもとに人と会話してしまうことがあると思うが、人と人として対話しながら社会を形作ることができれば良いと思う。</p> <p>先ほど受援力についての御意見があったが、今の子ども・若者は人との関わりの濃度を自分が選択できる環境にある。学校に行きたくなかったら行かなくてもいいなど、その選択が尊重されている分、大変な状況にあってもそれを隠すことができるし、今の子どもはそのスキルを持っていると思う。それは、子ども達がそうしたいというよりも社会がそうさせていると感じる。施策の中で困難を抱えている子どもとそうでない子を分けるのではなく、困難を見つけてもらえていない子どもが多くいると思うので、これからの施策を考えるときに表面化したものだけではなく、見えないものにも目を向けていってほしい。</p>
藤本委員	<p>声にならない声を拾い上げるためには環境づくりが重要である。こどもまんなか社会という言葉は誰かが端になるということではない。当初から委員として参画させてもらったが、地域の力を生かしていないことに課題感を感じていた。生かし切るシステムがないということがとても残念である。施策で汲みきれないニーズや声なき声を拾える団体が行政、地域と連携する枠組みの整理が必要と感じる。子ども家庭支援センターの役割として区はぐくみ室が相談機能を担っているが、マンパワーの面からも限界がある。区はぐくみ室と地域のネットワークがもっと連携することで大きな歯車が回ると思う。</p>
升光委員	<p>留置所や刑務官で面接をするとき、刑務所では刑務官がいるので優等生的な態度になってなかなか本音が聴けないが、留置所では1対1になるため本音が聴ける。また、やんちゃな子どもたち</p>

	<p>は最初は語らないが、語りだすきっかけとして、こちらから自身の子ども・若者時代や今の仕事の話を読むことによって、繋がりを感じて語りが始まることもある。意図的に聞き出そうとすると語りたくないと思ってしまうのではないか。先ほどの御意見にもあったように、語ってもらうためには、関係性が関わってくると思う。</p> <p>以前、地域の大先輩たちの集まりに呼ばれた際に、「若いのが来たぞ」と言われた。もしかしたら67歳の私の中にも、18歳や20歳の私が潜在的に生きていると思う。若者について語るときに、私の中の若者が語っても良いように思う。幼稚園の子どもも、若者も、「あの時ってどんなだったの」「おっちゃんときはどんなだったん」と会話するのが好きだ。そういった語り合いから何かが生まれると思う。</p>
山雄委員	<p>労働組合の団体に所属し、仕事、家庭、地域の中で困っている方を助ける力として活動している。今回初めて参加したが、安心して子どもを育てるということは、組合の活動と合致していると感じる。自分にも子どもがいたらという観点からみたとき、まだまだ必要なことがあると考える。若者とも意見を出しながら、より良い社会をつくっていきたい。</p>
山下（維）委員	<p>居場所について、あなたの居場所とはあなたが見つけた場所であり、私が提供する場所ではないというスタンスだが、しかし小学校にあがってなかなか授業についていけない、学校でフォローができない、担任の先生も疲弊するという状況がある。なぜこのような状況になるのか、私達ができることを手探りながらライフワークとして取り組んでいきたい。</p> <p>審議会はレスポンスがなく言いっぱなしで終わるのが残念だ。音楽も何か違うものが良いと思う。</p>
山下（和）委員	<p>子ども・若者が議題となったときに、広く世代全体を指すのか、ピンポイントで支援を要する人を指すのかあいまいになって議論を集約しづらくなる。その中で私が一番課題意識を持っているのは支援を要する人への支援であり、人的な資源が枯渇している状況において、関係機関と連携しながら解決すべきだと思う。ヤングケアラーの問題も教育委員会から他のところに担当が移って終わりではなく、それぞれが関わって解決策を考えてほしい。</p>
山羽委員	<p>公立小学校でもPTA組織のない学校が増えてきており、これは保護者の多忙が原因の1つとしてあげられる。共働き家庭が増え、乳幼児期からもスキンシップを図るのがだんだん難しくなっている。不登校やフリースクールに通う卒園児の話をお聴きすることもあがあるが、多くの団体が子どもたちのために何かを提案し、子ども</p>

<p>安保会長</p>	<p>に寄り添うことが大切だと感じる。今回初めて審議会に参加したが、先ほどの上田委員からの近い距離で話したいとの提案はとても良いと思う。</p> <p>京都芸術大学では児童館と共同して、プランターで育てたものを一緒に食べようという面白い企画をされており、図書館はもちろん大学など開かれた空間で、子どもたちが学生と一緒に過ごせる形ができれば良いと思う。内海委員のお話でもあったが、学生が教育実習前に子どもと触れ合ったことがなく戸惑ってしまうため、その練習をさせてほしいという申し出を受けることがある。社会全体で子どもと学生の隔たりが出てきていると感じるが、そういった課題に対し、今後この審議会がより意義のある形で進められていければと思う。</p> <p>短い時間のなか、意見に対するレスポンスをされたい場面もあったかと思うが、様々な御意見、御提案をいただき感謝申し上げます。</p> <p>それでは、本日の審議はこれで終了し、事務局へ進行をお返しする。</p>
<p>司会</p>	<p>以上をもって、令和7年度「京都市はぐくみ推進審議会」を終了する。</p> <p>(16時00分 終了)</p>